

「スピリチュアル」の系譜を描き直す

——ヒーリング技法「レイキ」の誕生から現代自己啓發言説まで——

平野直子

1 問題の所在

本稿では、「レイキ」というヒーリングの技法とその歴史についての検討を軸に、「癒し」「スピリチュアリティ」などの言葉で表現されてきた宗教とその周辺領域、特に宗教と医療の「あいだ」を論じる仕方について再検討することを目的とする。

「レイキ」とは、自分や他人の身体に手を当てて「エネルギー」（「宇宙のエネルギー」などと呼ばれることが多い）を流し込むことで、身体の健康状態の改善や、精神的な向上が得られるとする、日本生まれのヒーリング技法である。世界で実践したことがある者は数百万¹⁾とも言われており、現在英語圏の辞書にもその名をみることができる。日本での実践者は多くはないが、1990年代から「逆輸入」の形で知られるようになり、2000年代半ばの「スピリチュアルブーム」において実践者を増やした。

レイキがいつ、どのように誕生したのかについては、創始者の臼井甕男^{みかお}の「伝説」を中心に多くのことが語られてきたが、実は現在も、彼の事跡についてはわからないことが多い。しかしレイキを構成する技法の一部や用語法などからは、レイキのもとになった「靈気療法」が、大正から昭和戦前期に存在した（そして戦後にはほとんど忘れさられた）代替療法の一つ、「精神療法」²⁾に属するものであると推測することができる。「精神療法」は、当時流通していたさまざまな技法や言説——健康や修養、自己啓発や道徳倫理に関する教

説から、現在でいう「オカルト」的言説の要素まで——が組み合わされたもので、主に当時の都市生活者の間で人気を博した。本稿では、「精神療法」の特徴や成り立ちの背景を明らかにすることで、人々の心身や生活の悩みをいかに効果的に取り去るかということをも基本的な価値として成り立つ「場」³⁾のなかに、セラピー、代替療法、自己啓発などと呼び分けられてきた諸実践、あるいは通常医療や制度化された宗教が併存している状況を描き出すことを試み、「医療の周辺」「宗教の周辺」といった形で主題化されがちだった領域をより包括的にとらえなす視点を提示したい。

2 レイキから見る宗教、医療、「代替療法」

2.1 レイキとは何か

冒頭で述べたように、本稿で検討の中心となる「レイキ」とは、1990年以降に実践者を増やした、心身状態の改善や向上、あるいは自己啓発を目的とした技法である。普及・促進のための統一した組織はなく、さまざまな流派が存在するが、国内外問わず「レイキ」の名を掲げる実践は以下のような特徴を共有している。

①世界に満ちる生命エネルギーという前提

世界全体に満ち、人体にも影響を与えている、ある種の生命エネルギー（気、靈能などと表現される）の存在を前提とする。この療法では、これを「レイキ」（靈気）と呼ぶ。

②「手を当てる療法」であること

心身の不調は、レイキがうまく流れなくなること（「つまってしまう（煙突・パイプのつまりに例えられる）」と表現されたりする）でもたらされると考える。レイキでは、自分や他人の体に手を当てることで、このエネルギーを伝えるほか、呼吸によってこれを整える技法もある。

③「誰でもできるようになる」という前提

人間（もしくは動物一般）は本来「エネルギー」とつながれるようになっているので、基本的には誰でもできるようになる。レイキの論理を信じなくても治療の効果はあがるし、レイキも出るようになるとされる。

④参入と昇格のための「儀式」

誰でもできるものではあるが、レイキをうまく流すためには、レイキと「波長を合わせる」一種の儀式（「霊授」「アチューンメント」と呼ばれる）が必要とされる。また、より高いレベルの儀式に参加し、「シンボル（印）」や「マントラ（呪文）」を授けられることで、遠くからでもヒーリングができたり、他人に儀式を施す講師（「ティーチャー」「マスター」「師範」）の資格を得たりといった「レベルアップ」が可能だとされる。儀式には一定の金額（日本では、通常数万円）がかかる。

⑤範型としての開祖の物語

レイキを考案した人物である「臼井甕男」は実践者の中で非常に尊敬されており、彼の治療エピソードは彼らの実践の範型となっている。彼の写真や、「教義」として残した「五戒」と呼ばれる日常の心構えを記した詩、唯一残された手引き書なども重要視されている。

臼井とレイキの歴史に関しては、実践者が広く共有する以下のようなストーリーが存在する。臼井はさまざまな宗教や哲学などを学んだあと、京都・鞍馬山で断食修行を行い、その結果としてレイキの治療法を忽然として体得したとされる。そ

の後、1922年から1926年に没するまで、東京の治療所で治療活動を行ったり、全国をまわってレイキを広めたりした。臼井没後の1936年、彼の弟子である林忠次郎（1879-1940）がハワイ在住の日系二世・高田はわよ（1900-1980）にこの療法を教えたことで、レイキは日本からアメリカに伝わるようになった。1970年代後半になって実践者は大きく増え、現在は北米からヨーロッパ、南米、インドなどで行われている⁴⁾。

欧米で形作られたレイキは、日本では1980年代、ニューエイジ情報のオーディエンスを介してアメリカから紹介された。最初に紹介したのは1984年、オカルト・不思議現象の情報誌として人気を博していた『トワイライトゾーン』である⁵⁾。1990年代には、ニューエイジの影響を受けた日本の「精神世界」ブームにおいて、出版物やイベントなどにレイキの名が見られるようになった⁶⁾。2000年代に入って、「スピリチュアル」という言葉を冠した諸実践——不可知の存在との交流によってカウンセリングを行う「スピリチュアルリーディング」や、レイキのような生命エネルギーの存在を想定したヒーリング、特別な力があるという石といったグッズの販売など——が流行すると、レイキもそうしたものの一つとして大きく利用者をのぼした⁷⁾（平野 2012：99-101）。

2.2 宗教と医療のあいだ

日本の内外を問わず、レイキ（霊気療法）を行っている人々は、何らかの心身に関する問題を解決しようとしていたり、それらの向上を求めたりしている人である。しかし、病いや健康の維持に関わることであるからといって、医師などの資格を持った医療専門職によって行われているわけではないし、精神性の向上にむけた実践や超自然的存在への言及があるからといって宗教団体から提供されているというわけでもない。レイキは宗教と医療のあいだに開けた「場」で行われる実践の一つである。レイキの誕生の背景を紹介することで、本稿が目じりたいのは、この「場」に特有

の歴史と言説の存在なのである。

宗教と医療のあいだの「場」についての見方には、視点の置き方や方向性によっていくつかの種類がある。医療を中心にこれを見るときには、近代社会において生物医学に基づく制度化された医療が正統的なものであることを前提として、「そうでない、非正統的な医療へも目を向けるべき」というようなかたちで認識される。このような存在を特に主題として扱う研究としては、医療人類学のものが代表的だろう。たとえば医療人類学者のクラインマンは、現代アメリカにおける疾病／病い⁸⁾に関するセクターとして、ケアの専門職セクター、家族セクター、民俗 (folk sector) を挙げている。ケアの民俗セクターとは専門職セクター (生物医学に基づく通常医療だけではなく、幅広くケアの専門家や、カイロプラクティックのような制度化された「代替治療」の専門家も指す) に属さない治療者たちによる病気治しや健康維持法を指し、マッサージから健康食品、宗教的な「病気治し」まで、その内実はさまざまである (Kleinman 1988=1996: 342-349)。現代日本の医療環境にこの分類をあてはめれば、現代日本ではレイキは民俗セクターに属するケアの技法ということになる。

ケアの専門職セクター、特に生物医学による治療を支える医師や科学の専門家たちが、民俗セクターの実践に向ける目は概して厳しい。効果について「科学的検証がおこなわれていないあやふやなものが多い」(四国がんセンター 2012: 20) というのを大きな理由として、それにも関わらず値段が高い、標準的な治療に影響をおよぼしかねない、もしくは治療を拒否させることもある、といった点から利用に注意が促される。

一方、医療人類学や身体社会学などは、近代社会における生物医学と医師中心の医療制度の優越性を認めながらも、人々の「病む経験」の中に、医療の専門職セクター以外の領域がいかに大きな力を及ぼしているかということを強調する。宗教は、人々の病いの経験や身体の有りに大きく係

わるものの代表として、そこで常に注目されるものである。たとえばターナー (1984=1999: 71-89) はヨーロッパにおいてキリスト教の病いは神が与えたものであり、何らかの役割があるというキリスト教の解釈枠組が、当時の疾病と医業に大きな影響を与えていたこと、またこの解釈枠組が、近世初期に啓蒙主義的な身体観・疾病観が流布していく過程で、それらに対抗する医療観の形成の下支えになったと指摘している。視点をもっとミクロにおいて、現代日本でアクティブに活動する宗教の体験談をのぞいてみても、健康の悩みとそれが解消された奇跡の物語が並んでいるのを見ることができる。

クラインマンの分類にしたがえば、近代社会における宗教による治病実践も「民俗セクター」に属するものということになる。さらに民俗セクターの中には、特定の宗教団体や関係者から提供されるものではないのにも関わらず、「宗教っぽい」と言われる実践も非常に多く含まれる。レイキはその典型であり、手を当ててある種の見えない「力」を送り、心身の改善を目論むものであるが、それはしばしば世界救世教系列の新宗教における「手かざし」とよく似ていると言われる。宗教と医療のあいだには、このような正当な医療とも宗教とも呼び難い実践が多数息づく「場」が存在する。

では、宗教研究のほうから「宗教と医療のあいだ」を見るとどうだろうか。この領域では1990年代初頭から、「ニューエイジ」や「精神世界」と呼ばれるような、「教団という形を取る制度宗教・新宗教や地域共同体にとられない形で多様に生じている現代の精神文化に目を向ける」(芳賀 2007: 214) 試みが活発に行われてきた。そのなかには、上の「民間セクター」に含まれる、心身を癒す技法に着目したものも多い。ただし、宗教からのこの領域への注目は、心理面の癒しが中心となってきた。心理面の癒しへの注目は、ロバート・ベラーらによる「セラピー文化」——「心理学的な知識に基づく治癒や自己解放の理論

に基づき、他者の癒しや精神的指導を行おうとするセラピスト（心理療法家、臨床心理家）をあるべき人格のモデルとする文化——に関する議論へと結びつけやすく、「サイコセラピー的な文化」（小池 2007：10）や、自己に対するテクノロジーについての言説（牧野 2012, 2015）の現代社会への浸透といった議論へも発展させ得るアプローチである。

一方、そうした「サイコセラピー」的諸実践が、身体の癒しに関する実践の非常に近くか、あるいは同時に行われているものであることも指摘されてきた。たとえば島蘭進は、セラピー文化が消費活動という形で広く日本社会に浸透していることを示すために、「精神世界」ブームで行われているさまざまな「セラピー」を列挙している⁹⁾が、このリストについて以下のように述べている。

セラピー文化というとき、「心のケア」に主眼が置かれているとすると、ここには「からだの癒し」の方に力点があるものも含まれているだろう。たとえば、道教や仙道の「気」に関わる実践は、主に身体的な癒しや健康を目指して実践されている場合が少なくない。本書はセラピー文化や「癒し」の文化の動向を、主に心理療法の面から、あるいは「心のケア」の方面から見ているが、実はもっと広く「からだのケア」や代替医療や養生法の側面から見ていく必要がある（島蘭 2002：12-14）。

レイキはまさに、最後の文章で述べられている「からだのケア」の一つであり、実際に上に続けて島蘭が引用している「精神世界」で行われる技法リストの中にレイキが挙げられている。島蘭は「精神世界」における「癒し」の源流を、アメリカ 19 世紀の「心的治療」の流行にさかのぼり、なおかつ「癒し」の文化の歴史という観点から見れば、セラピー文化は伝統的な宗教文化の継承者として見ることもできる」と大きな見取り図を

描いている。また 20 世紀になってからは、「科学の発展によって、医学や心理学を基礎にもったセラピー文化が育ってくる。だが、その一方で宗教に境を接するセラピー文化が減びてしまったわけではない」ともしている（島蘭 2002：18-19）。

こうしてみると、宗教と医療のあいだに、その双方から周辺的なものとして位置づけられる、心身双方の悩みの解決を課題とする実践の領域があることになる。またその領域は、医療・宗教の領域からどちらからも切り離されているわけではなく、それに連続し、ときには相互に乗り入れるような布置関係にあるようだ。さらに島蘭は、この領域がある程度固有の歴史を描くことさえできる、比較的自律性のある「場」であることさえ示唆している。90 年にわたって「宗教と医療のあいだ」を渡り歩いてきたレイキを軸にすることで、考察が可能になるのはまさにこの点である。以下ではこれを、特に 1920 年代のレイキ（霊気療法）が属していた「精神療法」というカテゴリに注目して見ていこう。

3 「霊気療法」と「精神療法」

3.1 「霊気療法」に影響を与えたもの

白井甕男（1865～1926）が遍歴の末、鞍馬山山中において現在のレイキのもととなる「霊気療法」を創出したのは、1922 年とされている。白井は詳細なテキストを作らず、新聞・雑誌に広告を載せたりもしなかったため、現在のレイキ実践者たちの熱心な調査にも関わらず、彼の人物の詳細は今もってほとんどわからない¹⁰⁾。ただし、白井の言葉が掲載されているほとんど唯一の著作物である、『霊気療法必携』の「公開伝授説明」の用語法や考え方は、白井の療法が先行する（あるいは同時代の）他の治療者の影響を受けていることを示している（白井自身は霊気療法を自分の「独創」と主張しているにも関わらず）。以下、長くなるが彼の発言を引用してみよう。

……元より我が靈氣療法は宇宙間の靈能に基づく靈氣の独創療法でありますから、此に依って先ず人間自體を壯健にし、思想の穩健と人世の愉悅を増進するのであります。……

畏くも明治天皇の御遺訓を奉體し、我が教義を成就し心身練磨向上を期し、人たるの正道を歩むため、第一心を癒し、第二肉體を健全にしなくてはなりません。心が誠の道に適い、健全であれば、肉體は自から壯健になります。斯くて靈肉一如となって平和と享樂の生涯を完うし、傍ら他の病者を癒し、自他共に幸福を増進することが、白井靈氣療法の使命であります。……

……心靈的療法とも謂うことが出来ますが、多くは物質的療法とも謂うことが出来ます。其訳は術者の身体の何れの処よりも氣と光を放射します。殊に目口手より多く発現します。故に患部を二三分凝視しますか、呼吸を吹き掛けますか、手で撫でますか致しますと……立所に痛みをさり、腫れがひきます……此様な現象を現代の医学では何と説明しますか、斯の如き小説以上の事実があります。……

肉體の病気を癒すのみではありません。心の患い即ち煩悶、虚弱、臆病、優柔不断、神經質其他の悪癖を矯正することが出来ます。そして神や仏の様な心になって後人を治療することを主眼として自他共に幸福に充ちることが出来ます。……

我が療法は現代の科学を超越したる靈法でありますから医学に基礎を置きません。……患部を凝視呼吸按手撫手するのみで治療の目的を達しますから、苦き薬も吞まず、熱き灸もすえず短日月に病気が治るので、そこが我が独創の靈法という所以であります。……¹¹⁾ (傍線筆者)

白井による「靈氣療法」の創案に影響を与えたものを考察する際、この文章の中で注目すべき点は以下の3つである。

- ①「身体と精神の双方に働きかける、遍在する生命エネルギーが病気を治す」という基本的な考え方
- ②「靈氣」という用語の使用
- ③靈氣を放出・伝達するための技法（「凝視」「呼吸」「按手」「撫手」）

まず①から見ていこう。白井は自分の靈氣療法が、「宇宙間」にある何らかの特別な力（靈能）に基づくとしている。身体から放出される「氣」と「光」（明言されていないが、これが療法の名となっている「靈氣」である）はこれに由来し、心身を癒すものと想定されている。

実はこのような、「生命エネルギー（もしくは微小物質の流れ）」を利用・操作することで心身の健康を得る」というアプローチの治病・健康法は、白井の時代、珍しいものではなかった。さらに、このような療法を表わす「精神療法」というカテゴリ名も、ある程度人口に膾炙したものであったと考えられる。たとえば以下の新聞記事の例のように、「医師でない者が行う治療法」について言及される際、「はり・きゅう」「接骨」「あんま」「加持祈祷」と並んで「精神療法」が挙げられている。

健康保険法の保険給付は……近く閣議の決定を経て七月一日一般施行令と共に公布されるはずである……尚お保険医の範囲は右両医師および薬剤師に限る方針であるから開業医でない者が行うしんきゅう術、接骨術、あんま術、紅療法、加持祈とう、精神療法その他家伝的の治療法に対しては医療給付の範囲から除かれるはずである（東京朝日新聞 1926（昭和元）年6月23日「健康保険法による医療給付の範囲」、傍線筆者）。

ここでの「精神療法」¹²⁾とは、鍼灸やあんまと同様、心と身体、とくに身体の不調に対応する各種療法の一つである。1928年に出版された「精

神療法」治療家のレビュー書籍¹³⁾によれば、その数は「三万に余る」とされる。治療家たちはそれぞれ独自の療法の看板を掲げる一方で、「精神によって（精神を操作することで）病気を治す」というアプローチを共有していた¹⁴⁾。

これだけなら、現在の医療専門家が用いる精神療法（psychotherapy）とそれほど意味は変わらないが（注記2を参照）、「精神療法」家たちのいう「精神」は、それよりもっと大きな意味を持っている。彼らの多くは、心と体、人間と社会から宇宙の成り立ちまでを視野に入れた、独自の壮大な理論を作り上げ自分の治療の土台にしていた。そこではしばしば、「精神／身体」の二元論が、「見えないもの（エネルギー、呼吸、思考など）／見えるもの（物質）」という二元論と結びつけられていた¹⁵⁾。その上で、瞑想や坐法、呼吸法、「お手当て」などの技法によって、この「見えないエネルギー（≒精神）」を適切に扱ったり操作したりすることで、心身状態の改善や病気治しに用いようと試みるのである。

このような、「精神療法」の特徴的な考え方を、例を挙げて見てみよう。代表的な「精神療法」家のひとり、「人体ラヂウム療法（人体放射能療法）」を提唱した松本道別（1872-1942）は、著書の『人体ラヂウム療法講義』（1921）において、病気は人体から放射される「人体ラヂウム（人体放射能）」の欠乏によって起こると主張する。そして人体ラヂウムを身体の隅々までめぐらすことを目的とした、呼吸法や精神統一法からなる治療技法を展開する¹⁶⁾。彼は「人体放射能」を、「吾人の生命の原動力」、「精神の作用であり将又自然療能力」を含むものであると説明し、さらに以下のように続ける。

之を印度の婆羅門や瑜伽ではプラーナ支那の道家医家では氣、奧斯太利のメスメルは動物磁氣、……太靈道¹⁷⁾では靈子などと唱えて居るが、今日の最新科学から研究すると……放射性元素から放射するアルハー線や、真空

管内に於ける陽極線と同様の者である……¹⁸⁾。

つまり彼は「人体放射能」を、精神や思考および物理的物体に作用するエネルギーの両方とみなしており、それを世界中の伝統宗教や、先行する「精神療法」の概念、通俗的な科学知識など、由来も種類もさまざまな概念を用いて説明しようとしていた。

「精神療法」に見られる、心身を一元的にとらえようとする姿勢や、呼吸法や坐法などの技法は、一見伝統社会における身体実践、特に宗教的な身体実践との関係を想像させる。しかし上の引用でもわかるように、「精神療法」家たちは、広い範囲の時代や地域、まさに古今東西から引き出してきた概念や技法を組み合わせ、自分たちの技法を作り上げていた。

このことは、「公開伝授説明」で着目すべき2番目の点、「靈氣」という用語の問題と関わっている。世界に遍満する不可視のエネルギー（もしくは流体¹⁹⁾——松本における「人体ラヂウム」のような——を「靈氣」と呼ぶ治療家は、当時臼井の他にも多かった²⁰⁾。さらに言えば、1920年前後の「精神療法」においては、特に「プラナ」や「アウラ（オーラ）」といった国外の（特に英語圏経由の）概念を、「日本語で言えば靈氣」と呼び換える例がよく見られるのである。たとえば、1916年に発行された、アメリカのヨガ教師ラマチャラカの著書の翻案本『最新精神療法』²¹⁾では、プラナの言い換えに靈氣の語を当てている。上の松本道別や、「山田式整体術」のなかで「プラナ療法」を展開した山田信一（生没年不明）もプラナを靈氣と言い換えている。

印度哲学上から云えば、一切の精力と勢力とはプラナ即ち生力もしくは靈氣の顯現であって……換言すればプラナは宇宙の心意若しくは精神より發生すると信ずるのである（ラマチャラカ（松田靈洋訳）1916年『最新精神療法』4頁、傍線筆者）

ラマチャラカの翻案本や山田の「プラナ療法」と白井靈氣療法の類似点は、「靈氣」という語だけではない。これが「公開伝授説明」で着目した3番目の点、靈氣を放出・伝達するための技法とそれに用いられた用語法の問題である。白井は「公開伝授説明」で、手当て以外に呼気と凝視によって靈氣が放射されると言っているが、それとほぼ同じ用語法が、上記の「プラナ療法」の一群にも見られる。

プラナを伝達する方法は或は手を以てし或は凝視によりてし或は息気を吹き掛けてするので御座います(山田信一 1921年『山田式整体術講義第一巻 プラナ療法』288-289頁)。

そのほか、山田信一のプラナ療法のなかにある「清浄呼吸法」は、吸い込んだ空気をいったんとどめ、口から細く長く吐いていくやり方で、靈氣療法の「浄心呼吸法」によく似ている。宇宙に遍在する物質やエネルギーの波動によって空間を超え、被施術者がそれに感応する「遠隔療法」という技法も、プラナ療法を始め多くの「精神療法」と靈氣療法が共有している技法である。

こうしたことから、白井の靈氣療法は「精神療法」、その中でも「プラナ療法」の一群に近いものであると推測できるのである。

3.2 「代替療法」としての「精神療法」

すでに見たように、「精神療法」家は古今東西の心身に関する知識や技法を組み合わせて、独自のシステムを作り上げていた。それを可能にした社会的条件として、教育水準の大幅な向上と、それにより急成長した出版文化が挙げられる。1910年代までに、日本の出版界には、19世紀アメリカの代替療法文化や日本近世・近代の宗教的心身技法を中心に、「精神療法」家が利用できる情報があふれていた。ヨガの呼吸法やプラナの考え方については、1913(大正2)年刊行の忽滑谷快

天『養気錬心乃実験』や、上記のラマチャラカの著作が出版されていた。クリスチャン・サイエンスも、「正しい心の持ち方で(つまり精神の力で)身体の病気を消滅させる方法」と随所で紹介されていた。これをもとにした鈴木美山の「健全哲学(哲理治療法)」は、1913(大正2)年から新聞に大量の広告を出して知られていた。本田親徳の鎮魂帰神法は、大本教を脱退した友清九吾(歆真)の『鎮魂帰神の原理及应用』(1919)がその詳細を出版したことで、広く行われるようになった(吉永 2010:78)。

しかし「精神療法」書籍に載った体験談などを見れば、いかに壮大な理論があろうとも、人々が何より求めていたのは心身の健康状態の改善であることがわかる。「精神療法」が次々と生まれていった時期は、医師が病氣治療に独占的に関わる専門職としての地位を確立していった時期と重なっている²²⁾。「精神療法」家は著作の中で、近代医療や科学の力を求めつつも、それを不完全なもの、物質的であり過ぎて片手落ちなものとして描き、精神の力も併用する自分たちの優越を主張する。言い換えれば、「精神療法」は最初から、医師による医療(生物医学に基づく近代医療)のオルタナティブを提示する、「代替療法」として生まれてきたものである。

その背景には、近代医療への期待と現実の大きな差があったと推測される。当時の医療はまだ、抗生物質の実用化もウイルスの存在の確認もされていない段階で、科学的・近代的なはずの医療でも対処できないことが多かった。小嶋美代子は、1914年から1924年(大正3年~13年)にかけて、結核の蔓延やスペインかぜの流行、関東大震災などの影響により、日本の死亡率がその前後の時代と比べて高くなっていることを指摘し、これを「大正死亡危機」と呼んでいる(速水・小嶋 2006:61, 117-119)。そのような中、ある程度の教育と収入があり、なおかつ「科学的」な「物質療法」に失望していた市民たちは、「精神療法家」たちが提供するより野心的な療法——しばしば精

鈴木美山「健全道歌」(1913)

「今日だけは 怒らず 恐れず 正直に
職務を励み 人に親切」

臼井甕男「五戒」(1922~1925 ごろ?)

「今日だけは 怒るな 心配すな 感謝して
業にはげめ 人に親切に」

図1 「五戒」と「健全道歌」の比較

神修養や自己啓発の効果をも謳う——の実践者もしくは顧客になっていった。

4 癒しと自己啓発の系譜

ここまで、「精神療法」が1920年代の強い健康への関心の中で受容された「代替療法」であり、レイキやヨガなど、現在医療と宗教のあいだの「場」で行われている身体実践がすでにそこに見られるのが確認できた。しかしそれだけでなく、「精神療法」の諸実践の中に、現代の自己啓発へとつながる側面があったことも指摘しておかねばならない。

たとえば、「公開伝授説明」のなかにある「悪癖矯正」という言葉である。これは「精神療法」で非常によく使われた言葉で、臼井が挙げた「煩悶」「虚弱」のような心身の性質だけではなく、依存症のような、職業や学業の達成に影響を与える癖を直すということを意味していた。「精神療法」の体験談には、主たる顧客である都市市民たちが、急激な社会変動とライフスタイルの変化の中に適応しようともがく様子がうつつし出されている。「精神療法」はそうした市民たちに対し、精神をコントロールし生活を向上させるための技法を提供する面も持っていた。

臼井が霊気療法の教義と呼ぶ「五戒」という歌(図1参照)は、まさにその一例である。「五戒」の詩句は、前節で挙げた「健全哲学」(哲理療法)

主唱者・鈴木美山の「健全道歌」に似ていることが知られているが、どちらも社会生活により良く適応するための基本的な心の持ち方を示したもので、臼井の言葉で言えば心がこのような「真の道」にかなっていれば、身体の健康も自然と達成されるということになる。

注目すべきは、こうした「精神療法」の考え方や諸技法と、「ニューソート」——ポジティブ・シンキングなどにつながる、アメリカ19世紀の心身文化——との関係である。すでに見たように、鈴木は「健全哲学」を創始するにあたり、ニューソートに関連する運動の一つであるクリスチャン・サイエンスを参照していることを明らかにしている。さらに、臼井霊気療法を含むプラナ療法一派に大きな影響を与えたとみられる書籍、『最新精神療法』の原著者であるラマチャラカとは、1900年前後に活躍した有名なアメリカ人のニューソート著述家、ウィリアム・ウォーカー・アトキンソン(1862-1932)の別名である(吉永2004a:38)。

5 おわりに

人々の悩みや苦しみに、心理的・身体的の区別なく応えようとする実践が人気を得たのは、「精神療法」の時代にならではのことだろうか。個々の実践について言えば、たしかに時代による変化は見られる。「精神療法」のような病気治しと修養、世界観が全て含まれるパッケージは、1930年代後半には人気を落としていき、時代が下るにつれ健康、自己啓発、宗教などに分化していく傾向にある。アトキンソンの例で言えば、彼が1906年に刊行した*Thought Vibration or The Law of Attraction*が2007年に『引き寄せの法則』²³⁾と題され、人生論や自己啓発のカテゴリで出版されているのに対し、彼が広めたようなアメリカ化したヨガは、現在フィットネスの文脈で受容されている。

しかし宗教と医療、あるいは消費文化のあいだ

に着目すれば、そこには心理的・身体的問わず、さまざまな悩みに対しての解決法を提供しようとする無数のアクターがひしめく「場」があり、長いスパンで見れば（島蘭が書くように、前近代社会にまでさかのぼることができるかはどうかは議論の余地があるが）そのなかでさまざまな実践がおたがいに影響を与え合い、数十年の長いスパンで固有の関係性を形成していることが見て取れる。ヨガやレイキだけではなく、レイキと同時代に生まれた食事法・マクロビオティックなども含め、たくさんの実践がその「場」のなかで生き残り、現在も新しい実践者を生んでいる。

そこには分化だけでなく融合の動きも見られる。レイキについて言えば、1990年代から最も多くのレイキセミナーを開いて実践者を生んできたのは、自己啓発セミナーを運営する有限会社ヴォルテックスであった。また、レイキはその単純さから、マッサージなどの手技やほかのヒーリング技法とたやすく結びつく。医師などの専門家やメディアとの関係も見過ごせない。

こうした事例の綿密な観察を積み上げていくことで、長期にわたってある程度の自律性を持ちながら、時には宗教や医療へも乗り入れていく、宗教と医療、消費文化の「場」の様態を新たに描き出すことができるのではないだろうか。

[注]

- 1) 各国の公称実践者数を単純に足し合わせたもので、実体を反映しているか疑問であるが、「レイキ」実践者のなかで流布している数字である。
- 2) 紛らわしい点であるが、この「精神療法」の用例は1920～40年代前半までに特有のもので、現在の用例（主に精神科医療の分野で、psychotherapyの訳語として使われる）とは異なる。以下、1920～40年代前半を中心に、特定の代替療法のサブカテゴリを指す「精神療法」はカッコつきで示す。
 なお、1920～40年代前半においても、医師や心理学者は現代と同じような意味で「精神療法」の語を用いていたことにも注意が必要である。

- 3) 本稿では「場」という言葉を用いているが、ここにたとえばブルデューによる「界 (champ ; field)」を利用することで、より精緻な議論を展開できる可能性がある。つまりここで問題となっている「場」を、「心身の悩みを効果的に解決する、癒す」という価値をめぐり、医療、宗教、その他の消費サービスやグッズなどが、科学性や倫理性などさまざまな資本を用いて正統性や覇権を争っている一つの「界」として見るのである。
- 4) アメリカから日本へのレイキの再輸入のあと、白井の時代の「霊気療法」についての資料が断片的に見つかるようになり、それがインターネットなどで流布することによって、こうした物語にも細かいパリエーションが生まれていった。2000年代における、レイキの歴史についての語りについては、平野（2010）にまとめられている。
- 5) 管見の限りでは、『トワイライトゾーン』1984年9月号の「海外・日本二元取材 欧米で話題の宇宙エネルギーを吸収する霊気治療 手をかざすだけで万病が治る」（レポート・大河原孝二、取材協力・三井三重子）が最も早い。
- 6) 注記10の文献も一つの例であるが、そのほかに1996年に共同通信が配信した精神世界関係のイベントの記事にもレイキが見られる（5月30日『「精神世界」の現在』（下）自己探求と癒しの旅 明るい雰囲気漂う会場 フィリ・フェスティバル）など、1990年代には「精神世界」の書籍・雑誌・イベントでよく見られる存在となっている。
- 7) たとえば、2006年4月29日に行われた「スピリチュアル」なサービスやグッズの販売イベント「東京すびこん」では、販売されていた延べ187種類のサービスもしくはグッズのうち、レイキは16件を占めた（イベント配布物より筆者調べ）。
- 8) クラインマンは「病い」(illness)と「疾患」(disease)を区別しながら論を進めており、前者は病む人やその家族の、症状や能力低下(disability)についての経験であり、後者は生物医学的モデルにおける、「生物学的な構造や機能における変化」を表わしているとする(Kleinman 1988=1996 :

4-6)。

- 9) ここで島蘭が参考にしているのは、1991年に宝島編集部から発行された『精神療法と瞑想——心を解くセラピー&メディテーションガイド』である。目次は「躰」「息」「心」「想」などとテーマごとにわかれており、それぞれのページでは「マッサージ、ロルフィング、リバランシング」「リバーシング、ホロトロピック・セラピー」「ゲシュタルト・セラピー、ヒプノ・セラピー」「ポジティブ・シンキング、アクティブ・イマジネーション」などの技法が紹介されている。なお、同書タイトルの「精神療法」の用法は、この時期としては例外的に大正期のそれと近い。
- 10) 白井の生没年、出身地、霊気療法誕生の経緯についての簡単な経緯については、白井の死後弟子たちによって作られた墓碑——「白井先生功德之碑」(東京都杉並区)——が数少ない同時代資料である。これはレイキの日本「再輸入」後の早い段階で実践者に「発見」されている。白井が作った「白井霊気療法学会」は現在も200人ほどの会員をもって存続しているが、彼の人物像については上記の「碑」に準じた内容(同会は白井の墓参りを定期的に行っている)以上には伝えられていない。
- 11) 白井霊気療法学会編(1922)「公開伝授説明」『霊気療法必携』2-5頁より同会が1939(昭和14)年に発行した第15版を2010年に複製したものから引用した。複製された版の奥付によれば、第一版は1922(大正11)年9月、発行所は「心身改善白井霊気療法学会本部」である。
- 12) この「精神療法」については、井村宏次(1984)による再検討を嚆矢に、田邊信太郎(1989)や、田辺と島蘭進の共著(1999)、島蘭(2004)など、大正期から昭和戦前期における民間・代替療法に注目した著作においてしばしば触れられてきた。近年、吉永進一による『日本人の身・心・霊 近代民間精神療法叢書』(2004)の刊行やその後の研究(2007、2008)により、その位置づけがさらに明確になってきている。
- なお1920~30年代において、「精神療法」とともに「霊術」がほぼ同じ意味で用いられたが、後者は療法家自身によって使われる傾向があったようだ。また、「心靈療法」も同じ意味で使われることがあり、「公開伝授説明」ではこの言葉が使われている。
- 13) 当時活動していた「精神療法(霊術)家」313人の名を紹介し、主なものに講評を加えている。田辺(1989:83)、吉永(2004a:41)では、この本は「清水式精神統一療法」の指導者・清水英範を中心に作られたものではないかと推測している。
- 14) 「精神療法」流行の基盤として、明治30年代後半(1903年~1908年ごろ)に起こった催眠術ブームが挙げられる。精神の操作によって身体に作用を及ぼすことや、精神を客体化することといった、「治療上の基本理念」を与えたとされる(一柳1997:87)。
- 15) 心身の健康改善という「効果」は、療法としての目的であると同時に、こうした壮大な理論のアクチュアリティを支える役目も果たしていたと言えよう。その他に理論のアクチュアリティを身体的な面で実感する方法として、「精神療法」でしばしば重視されたのが「自動運動」——定められた坐法や呼吸法を行った結果、身体が意図せず動き出すこと——である。太霊道も人体ラヂウム療法も、自動運動を起こす技法を詳細に指導している。
- 16) 同書の広告によれば、人体ラヂウム療法は10日間(1回3時間)の講習で修得できるとされている。講習会費は30円(修得できない場合は返金)。人体ラヂウム療法による治療の報酬に定額はないが、結核ほか「難治の伝染病」の場合は1回1円で、治療報酬金100円以上を要するとある。
- 17) 田中守平(1887~1929)によって作られた初期の「精神療法」の一つ。全国紙にしばしば全面広告を出して注目を集め、会員は10万人と自称しており、1920年前後には「精神療法」の代名詞のように見られていた。宇宙や社会、自己などすべての根本となる実体を「太霊」と呼び、物質も精神もその一部である「霊子」が「発現」したのものであるという理論を展開し、霊子の働きの活性化を自動

運動により実感する技法や、活性化した霊子を患部に当てる一種の手当て療法を提供していた。太霊道の詳細については吉永（2008）を参照のこと。

- 18) 松本道別、1927、「修養篇」『霊学講座第一冊』人体ラヂウム学会本部霊学道場、p.2。
- 19) ほかに「生氣」などの言葉もよく使われている。
- 20) たとえば「日本心象学会」を主宰していたとされる川上又次など。川上の詳細は不明であるが、1919（大正8）年に『霊気療法と其効果』を出版している。また、広告や他の「精神療法」家の著書によれば、これも「プラナ療法」の一種であったようだ。
- 21) *Science of Psychic Healing* (2006) の翻案とみられる（吉永 2004a : 38）。
- 22) 1916年には近代医学教育による医師養成制度が確立し、医師免許を取得するには、医科大学・医学部を卒業するか、医学専門学校を卒業したうえで医師試験を受けるよう定められた（坂井ほか 2010 : 341-342）。また1923年には公法人日本医師会が設立され、国内唯一の医師の職能団体として活動を始める（新村 2006 : 256-257）。
- 23) 2007、林陽訳、『引き寄せの法則 すべての願いが現実になる』KKベストセラーズ。

[文献]

- Bourdieu Pierre, and Loïc J. D. Wacquant, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, Chicago; The University of Chicago Press. (=2007, 水島和則訳、『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店.)
- 芳賀学, 2007, 「分野別研究動向（宗教）——固有領域融解への諸対応——」『社会学評論』58（2）: 205-220.
- 速水融・小島美代子, 2004, 『大正デモグラフィ 歴史人口学で見た狭間の時代』文芸春秋.
- 平野直子, 2010, 「近代」というカテゴリにおける「普遍」と「個別」——手当て療法「レイキ」の80年史を事例として——『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56（1）, 48-61.
- , 2012, 「拡散・遍在化する宗教——大衆文化の中の「スピリチュアル」』『宗教と社会のフロンティア 宗教社会学からみる現代日本』勁草書房, 91-108.
- 一柳廣孝, 1997, 『催眠術の日本近代』青弓社.
- 井村宏次, 1996（1984）, 『新・霊術家の饗宴』心交社.
- , 2014, 『霊術家の黄金時代』ビニング・ネット・プレス.
- 小池靖, 2007, 『セラピー文化の社会学 ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ』勁草書房.
- Kleinman, Arthur, 1988, *THE ILLNESS NARRATIVES: Suffering, Healing and the Human Condition*, New York: Basic Books. (=1996, 江口重幸・五木田紳・上野豪誌訳『病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房.)
- 島蘭進, 2002, 「序章 セラピー文化のゆくえ」『つながりの中の癒し セラピー文化の展開』専修大学出版局, 3-33.
- 牧野智和, 2012, 『自己啓発の時代 「自己」の文化社会学的探究』勁草書房.
- , 2015, 『日常に侵入する自己啓発 生き方・手帳・片づけ術』勁草書房.
- 新村拓, 2006, 『日本医療史』吉川弘文館.
- 四国がんセンター「がんの代替療法の科学的検証と臨床応用に関する研究」班編, 2012, 『がんの補完代替医療ガイドブック 第3版』四国がんセンターウェブサイト, (2015年12月6日取得, [http://www.shikoku-cc.go.jp/hospital/guide/useful/newest/cam/dl/pdf/cam_guide\(3rd\)20120220_forWeb.pdf](http://www.shikoku-cc.go.jp/hospital/guide/useful/newest/cam/dl/pdf/cam_guide(3rd)20120220_forWeb.pdf)).
- Singh, Simon and Edzard Ernst, 2008, *TRICK OR TREATMENT?: Alternative Medicine on Trial*, London; Corgi. (=2010, 青木薫訳『代替医療のトリック』新潮社.)
- Turner, Bryan S., 1984, *The body and Society: Explorations in Social Theory*, Oxford: Blackwell. (=1999, 小口信吉・藤田弘人・泉田渡・小口孝司訳『身体と文化——身体社会学試論——』文化書房博文社.)

- 吉永進一, 2004a, 「解説 民間精神療法の時代」『日本人の身・心・霊—近代民間精神療法叢書』8, クレス出版: 1-44.
- 吉永進一, 2004b, 「解説」『日本人の身・心・霊—近代民間精神療法叢書Ⅱ』7, クレス出版: 1-17.

- 吉永進一, 2007, 「精神の力—民間精神療法の思想」『人体科学』16 (1): 9-21.
- 吉永進一, 2008, 「太霊と国家—太霊道における国家観の意味—」『人体科学』17: 35-51.